

同級生

暑かった夏もようやく過ぎ、朝晩はめっきり涼しくなった。と思っていたら早いもので、ふと気が付けば駅前の大通りの銀杏並木が、もう黄色く色づき始めている。

駅前の喫茶店。

神沼悟が、入り口のドアを押して入ってきた。今どき珍しい手動のドアだ。悟は窓際の席に座り、コーヒーを注文した。

平日の午前九時、客は悟を入れて三人だ。他の二人の男は常連らしく、カウンター席に座りマスターと談笑している。二人ともリタイア後だろうか。マスターを含めた三人の年齢は、田舎にいる悟の父親より少し上かと思われた。

「お待たせしました」

マスターがコーヒーを運んできた。テーブルにカップと伝票を置いて、

「ごゆっくり」

と言ってカウンターのの中へ帰っていく。ミルクは無しだ。

覚えられたな。

悟は思った。

悟がこの店に来るのは、今日で四日連続だった。悟はコーヒーはブラックで飲む。マスターはそれを覚えていて、今日は最初から、ミルクを提供しなかったのだろう。

若いといっても学生に見える歳ではない。

そんな男が、四日続けて午前中にやってきて、コーヒー一杯でお昼まで時間をつぶしているのだ。

覚えられて当然か。

悟は苦笑した。カップを取り一口飲んで新聞に目を落とす。そうやって今日もお昼までの時間を過ごすのだ。

ランチ目当ての客で席が埋まり始める正午過ぎ、悟は喫茶店を出て、十五分ほど歩いたところにある小さな公園に入った。

入り口近くの自動販売機でお茶を買い、少し歩いて大きな桜の木の下にあるベンチに座った。鞆から弁当箱を出し、広げて食べ始める。すると何処からか、野良猫が現れた。仔猫を卒業したばかりの若猫で、四日前、焼き魚を少し分けてやってからの顔なじみ。キジトラで野良にしては毛並みもきれいで目ヤニも出していない。姿もよく、かなりの美猫だ。

「よう、今日も元気そうだな」

悟が野菜と炊き合わせた鶏肉を一つ投げてやると、ニャーと鳴いて、その場で食べ始めた。

そのニャーが、悟には、

「ありがとう、あんたも元気そうね」

と聞こえる。

「俺か、俺はあんまり元気じゃない」

悟が答えると、早や鶏肉を食べてしまった野良猫は、ポンとベンチに飛び乗り悟の横に寝そべった。

悟は食べ終えた弁当箱を鞆にしまい、僅かばかりのお裾分けに満足して、毛づくろいを始めた野良猫の背中を撫でてやった。

悟は四日前、八年勤めた保険の代理店を退職した。長年続く不景気での営業不振、リストラだった。一応、二ヶ月前に言い渡され、それから再就職口を探したが、不景気なのはどこも同じ。見つからないまま退職の日を迎えてしまった。

地元では一流の進学校から、そこそこ有名な東京の私立大学を可もなく不可もないという成績で卒業、そのまま地元には帰らずに就職した。去年三十歳を目前に、取引先の紹介で知り合った三歳年下の美智子と結婚した。美人で気立てもよく、自分には過ぎた妻だと、悟は思っている。

その美智子にはまだ、退職したことを伝えていない。

二ヶ月前、リストラを言い渡された日、帰

宅した悟は、美智子に伝えようとした。

だが、夕食のテーブルにいたとき、

「話がある」

言い出す前に、美智子の方から、

「お話があるの」

満面の笑みで告げられた。

「何？」

とりあえず聞く側にまわる。

美智子は、少し羞恥んだ様子で、

「できたみたい」

と言った。

「え」

できたって、まさか子供か？

悟は耳を疑った。

いや、夫婦仲はいたって良好。子供ができたとして何の不思議もない。これもし前の日だったら、悟も飛び上がって喜んでいただろう。だがその日、二か月後に辞めると言い渡された。子ができたと言われても、単純には喜べない。

「二ヶ月だって」

美智子の声が遠く感じた。

「嬉しくないの」

悟の反応が弱いのを訝って、美智子が顔を覗き込む。

「あ、いや、急に言われたから、びっくりしてしまっ……、嬉しくないわけじゃないじゃないか」

なんとかその場は誤魔化したのが、リストラの事は、とても告げられなかった。

その後も、身重の妻への気遣いから、言い出すことができず、

再就職が決まってから……。

と、思ったが、それも決まらず、とうとう言えないままに、退職の日を迎えた。

それから四日、毎日、今日は言おうと思うのだが、言えない。そして毎朝、これまでと同じように、妻の作ってくれる弁当をもって家を出ていた。

午前中は喫茶店で新聞を隅々まで読み、そ

して、公園のベンチで弁当を食べ、夕方まで本を読んだり、雑誌のクイズをしたりして時間をつぶしている。一昨日は失業保険の手続きのためハローワークへ行った。そこで求人を探したが、自分に合うと思うものはなかった。

野良猫は悟のことを全く警戒する様子もなく、ゴロゴロと気持ちよさそうに喉を鳴らしている。

ふと見上げると、真つ青な秋空に紅葉しかけた桜の葉が映えている。

幸いなことに四日間、天気は良い。

雨が降ったらどうするんだ、寒くなったら……。

そこまで思っ

いつまでこんな生活を続ける気だ。

と、自分ながらに情けなくもあり、それでいて現実味が薄く、どこか可笑しくもあり、思わず笑ってしまった。

ベンチのすぐ横で、小さな折りたたみの椅子に座って、学生と思われる若者がスケッチブックの上に一心に絵筆を走らせて、目の前の桜紅葉を写している。

悟は暫く、その若者をじっと見つめていたが、やがて鞆から文庫本を取り出し、読み始めた

文庫本を一冊読み終えたところで、ようやく日も傾いた。が、今日はまだ帰れない。

昨夜美智子が、

「このところ、帰りが早いわね」

何気なく言った言葉が気になった。

その場は、

「そう言えばそうだな」

と、その時気づいたようなふりをしてやり過ぎしたが、今朝、出がけに、

「久しぶりに晩くなるかもしれない」

と言ってしまったのだ。

さて、どうするか。

悟は立ち上がり、公園の出口に向かって歩き出した。

いつの間にかベンチからいなくなっていた野良猫がまた現れて、まるで送り出してくれるかのように、公園の出口までついてきて、ニヤーと一声鳴いて戻って行った。

少し飲んで帰るか。

悟は、夜の街に来ていた。

秋の日は釣瓶落とし。辺りはすでに暗くなっている。だがまだ時刻としては宵の口。狭い道の両側にある店の看板には、半分くらいしか灯が入っていない。

悟は、適当な店を探しながら歩いた。

十分くらい歩いただろうか、

もう、何処でもいいから入ろう。

歩き疲れた悟がそう思い始めたとき、前から歩いてきた男の肩が悟の肩に触れた。

「気を付ける、何処見て歩いていやがるんだ！」

男は悟を怒鳴りつけた。

「何だと！そちらからぶつかって来たんじゃないか」

悟が言い返した。普段は極力争い事を避ける悟だが、やはり胸に溜まったものがあつたのだろうか。

「おもしれえ」

相手は悟につかみかかるや、顎に一発パンチを入れた。

背は低くないが華奢な悟に比べて、その男ははるかにいい体格をしている。それに見たところどうも素人ではなさそうだ。

男は悟を殴り続け、蹴り続けた。

多くの野次馬が集まってきたが、遠巻きにして眺めるだけで、止めようとする者はおろか警察に通報する者さえいない。

死ぬのかな、俺。

悟の意識が今にも途切れそうになった。その時、

「警察よ、警察が来るわ」

野次馬の後ろの方から、少しハスキーな女の声が聞こえた。

その声を聴いた男は、

「運のいいやつだぜ」

倒れている悟に捨て台詞を残し去って行った。

警察が来たというのは女の機転だったらしく、その後、お巡り一人も来る様子はなかった。

やがて野次馬も散って行き、その場には「警察が来た」と叫んだ女と悟の二人が残された。

女が悟の傍に駆け寄って、声をかける。

「大丈夫、立てる？」

悟は起き上がろうとするが、起き上がれない。

「喧嘩するのはいいけど、相手を選ばなきゃあ、あいつ、このあたりを仕切っている組の若い者よ」

言いながら、女は悟を助け起こした。

「ありがとう。助かったよ」

悟は女に支えられてようやく立ち上がるこゝとができた。女の身体は女性にしてはがっしりとしていて頼りがいがある。

「そこに座りましょう」

女は、すぐ傍の食堂の待合のベンチを指すと、悟を座らせて、自分も隣に腰かけた。

そこで、二人は、初めてお互いの顔をはっきりと見合うことになった。

あ。

女の顔を見た悟は、暫し息をのんだ。

それほどに女は綺麗だった。妻の美智子も大学時代ミスキャンパスに選ばれたほどの美人だが、今日の前にいる女には到底かなわない。

綺麗だ。

悟は、女に見惚れた。

どれくらいの時が経つただろうか。悟は妙なことに気が付いた。女もまた、悟の顔をま

じまじと見ているのだ。悟は、醜男ではないが決して飛びぬけて美男ではない。こんな美女に見惚れられるようなことは断じてない。

しかし、女は悟を見続けている。

「何か……」

悟が言いかけた時、女が自信なげに呟いた。

「悟？」

え、

悟は戸惑った。

どこかで会ったのか。いや、こんな美人に一度でもあつていたら忘れるわけがない。でも相手は俺の事を今「悟」って呼んだ。どういうことだ。

悟の疑念をよそに、目の前の女は、今度は確信を得たように、

「悟、そうだ、悟だ。神沼悟。俺だ、俺、俺、

あー、こんな格好してるからわからないんだよな。俺だよ。誠。鈴鹿誠」

大声で言う。

え、何だ？

悟は混乱した頭で考える。

確かに高校の同級生に、鈴鹿誠という男がいる。野球部で共に汗を流した大切な友だ。

だが目の前の美しい女が、その鈴鹿誠だとは、悟には到底信じられない。

「いやー、久しぶりだな。成人式のついでに田舎でやったクラス会以来か。こんなところで会うなんて。あ、結婚式、招待してもらいながら行けなくてすまなかったな」

と一人でしゃべる女、いや誠に、

「ちよっと待ってくれ。鈴鹿誠って、あの鈴鹿誠か」

なんとも妙な尋ね方をした。

「そうだよ。お前がショートで俺がサード、二人で南高の三遊間を守った、鈴鹿誠だ」

信じられない。

悟は絶句した。

そんな悟をよそに、

「ちよっと待って」

誠がスマホを取り出して電話を掛ける。

「もしもし、ママ。美鈴です。今日、同伴で、少し遅れまーす」

留守電だったらしく、一方的にそう言って電話を切ると、

「俺んち、この近くなんだ、お前、時間あるんだろ」

有無を言わず、悟を自分の家に連れて帰った。

繁華街から通りを一本隔てたところに、誠のマンションはあった。

3LDK。一人暮らしには充分すぎる広さだ。女性の部屋らしい花柄のカーテンに、調度も派手ではないが、かわいらしい。勿論きれいに片付いている。そんな部屋のリビングで、悟は傷の手当てを受けた。

自分の目の前にいるこの美女が、あの鈴鹿誠？

悟は、まだ信じられない。

目を閉じて、昔の事を話す声を聴いていると、間違いなく高校の同級生の鈴鹿誠なのだが、目を開けると、そこには絶世の美女が居るのだ。

悟は混乱していた。

しかし、そこは多感な時期を一緒に過ごした高校の同級生。暫く昔話をしていると、誠が女の格好をしていることがだんだんと気にならなくなり、果てには目の前にいる美女が、高校時代の誠に見えてくるから不思議なものだ。

「これでよし」

手当てを終えて、お茶を入れると立った誠の背中に、

「東大出て外務省に入ったお前がなあ」

感慨深げに悟が言う。

「知らなかったら口説きそうだ」

「馬鹿」

誠が、紅茶を入れたカップを二つ、テーブルに置いた。

「ずっと、本当の自分はこんなじゃないっ

て思ってた。去年、三十を目の前にして、このまま世間に、いや自分に嘘をついたままで人生終わっていいのかって思った。今しかない。今が最後のチャンスだって。気が付いたら、辞表出してた」

誠は悟と向かい合わせに腰掛けて、紅茶をすすった。

「思い切ったことを……」

「一度しかない人生だ。自分らしく生きたいじゃないか」

「勇気あるなあ、羨ましいよ」

悟が妙に感慨深げなことを訝しく思ったのか、

「何かあったか」

誠が悟の顔を覗き込んだ。

「実は……」

悟は、四日前に会社を辞めたこと。それを身重の妻に話せないでいること、四日間、出勤するふりをして、喫茶店と公園で時間を潰していたこと、ハローワークにも行ってみたが、なかなか自分にあった仕事が見つからないことなど、すべて話をした。

黙って聞いていた誠がぼつりと言った。

「お前も自分らしく生きればいい」

「俺にはこれとって……」

「あるじゃないか」

誠は壁の方を見やった。

悟が誠の視線を追う。

そこには一枚の風景画が掛けてあった。

「あ、俺の絵、まだ持っていてくれたんだ」

「描けよ」

「描けよって、絵描きになれって言っているのか」

「そうだ」

「無理だ。俺の絵では生活できないよ」

「そんなことはわかってる」

「え」

悟は、からかわれたのかと思い、むっとした。そんな悟の気持ちをよそに、誠は続ける。

「なあ、悟。俺が今の仕事、好きでやり始め

たと思うか」

「だってお前……」

「俺、官僚の仕事、結構好きだったんだ。もし、女性として続けられたら、辞めなかったよ。でもそれは無理だった。だから辞めた。けどな、人間食べていかなきゃならない。稼がなきゃならないんだ。そして今のこの国では、俺みたいな者が本当の姿で出来る仕事は、この仕事ぐらいしかない」

悟は何も言えなかった。

誠は続ける。

「要は、自分が一番大事なものは何かだ。お前、ハローワークへ行ったけど自分に合う仕事はなかったって言ったよな。でも、コンビニの店員とか居酒屋の店員とか、工事現場のガードマンとか、アルバイトだと割り切ったら、結構あるんじゃないか」

「それはそうだが」

「本職は絵なんだ。そして足りない分をアルバイトで稼いでる。そう思えば、どんな仕事でもできるんじゃないか」

「そうだな……」

悟は壁に掛けてある自分の絵を眺めた。

悟は中学時代は美術部だった。それ以前、物心ついたときから描くのが好きで、気が付いたら絵筆を握っていた。腕前もかなりなものだ。市や県のコンクールで複数回の入賞経験もある。当然高校でも美術部に入ろうと思っていた。

だが、入った高校に美術部がなかった。

入学式の日、部員が九人に満たない野球部に強引に誘われて入部した。そこで同じく半分無理やり連れてこられた誠と出会ったのだ。

二人は、キャッチボールくらいしかしたことがなかった。だが、新入部員を加えてやると九人になった部だ。悟も誠も入ったその日からレギュラーだった。野球の名門校のように、ボール拾いもなければ先輩の世話もない。練習の準備も後片付けもみんなで行った。

決して好んで入った部ではなかったが、悟は、練習も試合も楽しくて、誠と一緒に毎日夢中で白球を追った。

悟たちの通っていた高校も、他の進学校の例にもれず、部活動は二年生で終わりだ。

今日の前にある絵は、三年生の秋、ちょうど今頃の季節、校庭の桜紅葉を描いたものだ。誠が気に入って持って行った。

まさか、十年以上経った今も飾っていてくれるなんて思ってもみなかった。

悟は、今日公園で一心に絵筆を走らせ、桜紅葉を描いていた青年を、そしてその青年をじつと見つめていた自分を思い出した。

俺は、描きたかったのか。

あの時、懐かしく微笑ましく見つめながらも何かザラッとした感触。それが何なのか、あの時はわからなかった。でも、今、それが自分でも気づいていない、一種の心残りを目の前にした気持ちのざわつきだったとわかった。

「描けよ」

自分の絵を眺めている悟に、もう一度、誠が言った。

「挿絵でも、イラストでも、公園で似顔絵描いてもいいし、描き溜めた風景画、路上で売ってもいい、俺は好きだぜ。お前の絵。何かあったかくってさ」

「うん」

悟が絵を見たまま、小声で呟いた。

「やってみるか」

少し声が大きくなる。

「やってみるか」

今度は、誠の方を向いて言った。

「よし、打って走って守れる画家、神沼悟の誕生だ」

誠が大声で言って、ニッと笑った。

打って走って守れる画家。

高校時代、戯れに悟が言っていた言葉だ。

こいつ、そんなことまで覚えていたのか。

悟は誠を見つめた。

まさか、こいつ俺のことを……

悟がそう思いかけた時、まるで悟の心の声が聞こえたかのように誠が言った。

「誤解するな、お前は俺のタイプじゃない」

「え」

なぜか慌てる悟に、誠は続ける。

「誤解するなで思い出したが、これも誤解しないでほしい。さっき今の仕事、好きで始めたわけじゃないって言ったが、嫌々続けているわけじゃない。やっているとこれが結構面白いんだ。いろんな客の人生が見える。官僚も来る。疲れてるんだよ、みんな。俺もこんなんだったかな、なんてな。そしてそんな客の気晴らしに少しは役に立ってるんだって思うとやりがいも出てくる。ほら、俺たち野球なんてやろうと思っていなかったじゃないか。それが、気が付いたら二年間野球漬け、毎日夜遅くまでボール追っかけてたよな。どんなことでも、やってみたら、面白くなってくるんじゃないか。俺はそう思う」

黙って聞いていた悟が、誠を見てにっこりと笑った。

「何だよ」

誠が問う。

「やっぱり優等生の言うことは違うと思ってな」

「馬鹿にしてるのか」

「いや、本当にそう思うんだ。ありがとう。」

誠のおかげで道が開けた気がする。あすもう一度、ハローワークへ行ってみるよ」

悟は晴れ晴れとした表情だ。

自分に合った仕事がないなどと贅沢なことを言っていないで、自分にできる仕事を探そう。そしてその仕事の合間に、絵を真剣に描く。趣味としてではなく一生の仕事として。

さて、そうと決まれば、早く帰って、美智子にすべてを打ち明けよう。

「ありがとう、誠。今日お前に会えて、本当

に良かった。近いうちに店にも寄せてもらおうよ」

立とうとする悟の両肩を誠が抑える。

「ダメ、帰さない」

誠だと解つていてもドキッとした悟は、照れ隠しに、

「馬鹿、よせ、気持ちの悪い」

怒ったように言う。

「お前、俺のママへの電話、聞いてなかったのか」

「電話？」

そういえば、俺をここへ連れてくる前に掛けてたな。たしか、少し遅れる、同伴で少し遅れるって言ってたよな。同伴？その同伴の相手って、まさか……。

「同伴の相手って、俺？」

悟は、誠の顔を見た。

誠は、その美しい顔に笑みをたたえて、

「そうだ」

と頷く。

「おい、嘘だろ。俺、そんなに金もってないし」

「貸しとく。この時間に一人で出勤させる気か。協力しろ」

「そんな、貸しとくって言われても、いつ返せるかわからんぞ」

「出世払いだ。担保もあるしな」

「担保？」

「お前の腕。返せなかったら一枚描いてもらうよ」

誠は悪戯な目で笑っている。

「さあ。早く」

来た時と同じように、誠は悟を有無を言わず連れ出した。

悟と誠は、夜の街を並んで歩いた。

「今日はとことん飲もうぜ」

「え、でも……」

「かみさんが怖いのか」

「馬鹿な」

ふたりの会話はどこにでもいる仲のいい男友達のそれだった。だが、歩いていくふたりの後ろ姿は、何処から見ても同伴の客とホステスだ。

「大丈夫、帰り、俺と一緒に行って謝ってやるから」

「馬鹿、その格好で来られたら余計ややくしくなる」

何とも奇妙な二人の姿を、ようやく顔を見せた居待の月が、優しい光で照らしだしていた。